

説教 『疲れた時代のさざ波になる』山本 護 牧師
聖書 イザヤ書 55：8～11／マタイによる福音書 11：16～19

「今の時代(マタイ 11:16)」とは、こう譬えられた。「笛を吹いたのに、踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、悲しんでくれなかった(11:17)」。これは何のことか。広場で遊ぶ「子供たちに似ている(11:16)」と言うことから、「宴会ごっこ(笛を吹く)」や「弔いごっこ(葬式の歌)」なのだろう。

時代を遡り、子供たちの遊び方を眺めてみよう。しらけた宴席を模した遊び、悲しまない葬式を模した遊びの何がおもしろいのか。想像するに、宴会ごっこには、場を盛り上げようと笛を吹いても義理事の招待客はしらっとしている、というアイロニーがある。弔いごっこでは、泣き女たちが大袈裟に悼んで悲しみを演出するが、非情な客は酒と御馳走に気を取られている、というユーモアがある。

裏側の本音を揶揄する子供遊びを譬にして、イエスは「今の時代」の何を語ったのか。喜びを喜びとせず、悲しみを悲しまない、冷やかな魂か。「あなたがたが認めようとするならば分かることだが(11:14)」、新たな希望を認められない「今の時代」。長い抑圧が、幻滅と疑心暗鬼をならいにしてしまったのか。「ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、〔あれは悪霊に取りつかれている〕と言ひ、人の子が来て、飲み食いすると、〔見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ〕と言ひ(11:18~19)」。

「今の時代(11:16)」とは、まさしく「現代(いま)の時代」ではないか。不登校、非正規雇用、ひきこもり、孤独死、格差社会、米国の子分たる卑屈な専制政治。世は疲弊して希望を失い、未来への期待を著しく低下させている。洗礼者ヨハネの言葉を「意味」として聞かず、変人の禁欲として拒絶している。人の子イエスの言葉も「内容」として聞かず、「ありゃ、大酒飲みの大食漢で穢れている(11:19)」と吐き捨てている。教会は「今の時代」、ヨハネやイエスのように「拒絶される側」でありたい。

私たちキリスト者は「今の時代」、どんな希望を語りうるのか。疲弊した世に建てられている教会は、何を現しうるのか。「しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される(11:19)」。「知恵」とは、知性やひらめき、功利的な小賢しさとはまるで違う。知恵とは「神の働き」そのもの。人間の傲慢と無関心を打ち砕き、悔い改めさせ(転換)、弱さを憐れみ、神の愛へとむかわせる働きである。

人間の「働き」では希望を掴みえないが、予測や判断では捉えられない仕方で、真の希望を出現させる「知恵の正しさ」。それは、子供の遊びで揶揄されている形式的な「正しさ」ではない。子供の毒や大人の含羞をも内に含んで、人々をふんわりと謙虚にさせてしまう、奥深い豊かな恵み。弔いごっこで遊び尽くした悪ガキ共が、「また明日な」と路上で約束し合う夕暮れ光景が、なぜか思い浮ぶ。

「天が地を高く超えているように、わたしの道は、あなたたちの道を、わたしの思いは、あなたたちの思いを、高く超えている(イザヤ 55:9)」。そんな天からの雨が、自然を養い、人を生かす(55:10)、恵みを気づかぬままに受ける。その豊かな恵みは、「人間の言葉」で言い表され、「わたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす(55:11)」。神が与える使命はワンパターンではない。禁欲変人のヨハネのようにか、大酒飲み of イエスのようにか、私たちは疲れた世のさざ波となる。



【おまけのひとこと】

刻々と到来する新しい時代 追い風に乗るのではない むしろ むかい風の中に立とう キリストはいつも時の突端におられるのだから 教会は二番手 幾つかの三角波の間に見え隠れしている